



三ツ矢は全滅の危機



朽木でも床上浸水



昭和28年台風13号のすさまじさを伝える当時の新聞

# 「大災害のない地域」だと思っていませんか？

## 未曾有の大災害「安曇川水害」を教訓に

最近、私たちのまわりで災害が頻発しています。特に、地球規模での異常気象は、考えてもいなかったような災害が、突然起こるといふ危険性ははらんでいます。今号では、災害発生から半世紀以上が経過しなお大災害の代名詞とされる、昭和28年の安曇川大水害を振り返ります。台風シーズンを迎え、過去の災害を見つめなおし、災害の恐ろしさを再認識するとともに、今一度、災害について考えてみましょう。

### 台風13号の爪痕

昭和28年9月25日。中心気圧960hPa、大型で非常に強い台風13号は、時速40キロで伊勢湾から渥美半島に上陸し、各地で猛威をふるいました。

滋賀県は、台風を中心からは外れたものの24日午後から25日夜にかけて雨が激しく降り、多い時で時間雨量約50ミリ、降り始めからの総雨量は458ミリを記録。

この台風による被害は、県下全域に及びましたが、高島郡での被害が特に大きく、安曇川では増水により中流部数か所で堤防が決壊しました。朽木村では、2日間通行が途絶え完全孤立し、市場付近ではどの家も半

壊、またはそれに近い状況でした。安曇川にかかる橋梁は激流により軒並み流失し、決壊口から流れ出た濁水は安曇村、青柳村、本庄村をひとのみにしました。

安曇川は急流河川であることから、古代よりいかだ流しや河口部でのヤナ漁業などが発達し、人々との関わりも深く、また三万町歩にも及ぶ湖西の穀倉地帯をうるおしていました。しかし、ひとたび豪雨に見舞われると、土砂ですぐに川床が高くなり、堤防が決壊するといった水害に過去何度も悩まされてきました。

台風13号がもたらした大雨でも水害から免れることができません。最も被害が大きかった青柳村では、死者13人、行方不明者1人を出す未曾有の

大災害となりました。

この水害がどれ程のものであったかは、当時の新聞記事などどうかがい知ることができます。

### 堤防決壊 一瞬にドロ海化 安曇川沿岸 ほとんど全滅

青柳村三ツ矢では、一般民家の屋根のヒサシまで浸水し、全滅の危機にひんしていました。あちこちで悲鳴をあげて救出を叫んでいる人を駐在所巡査が首までつかって救助にあたっていました。

後日、水が引いたときには家の形すらなく、流された家財道具が、2週間後、対岸の近江八幡で見つかったとの証言もあります。

また、本庄村川島では、400mしか離れていない場所で、高さ十数メートルの堤防が約300mの幅で決壊。決壊口から流れ込んだ激流は、わずか数分で床上90cmまで浸水し、瞬間に泥海と化しました。水は流れ込み続け、被災から6日が経ってもなお60cm以上浸水したままでした。復旧築堤工事が地元民総出と県土木課のブルドーザーが出勤して懸命に行われましたが、水の流れが強く見通し

